



Title	土橋家旧蔵書目録（三）
Author(s)	
Citation	語文. 1955, 15, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

土橋家旧蔵書目録(三)

五 河瀬菅雄著述

一 冊

1 奉納三吟和歌

総二十三編、横十六編。仮縫表紙共十四枚。三吟とは菅雄・妻・娘の詠作の意。内題「奉納天満宮三十首和歌」源菅雄独吟」とあり、関路初春以下二十九首の題詠和歌をならべ、つづいて「十首和歌」源氏妻近子独吟」とあつて、鳶花以下九首の作、終りに「三十首和歌」源氏女幾子独吟」とあつて歳暮立春以下の同じく題詠和歌がある。

右一巻者雖井蛭之況吟有幸奉納聖廟之齋庫者也
壬時元祿十四辛巳曆九月吉辰

妻 菅 雄
女 幾 子

2 備中日記

といふ奥書きがある。

総二十五編、横十六編。表紙は藍色の濃淡による細かい市松模様。題簽に「備中日記金」とある。本文五十七枚。本書は、元祿十五年筆者五十六才の時、かねて在京の知人妻木某

を介して、備中倉敷の篤字者藤井規英よりの招きを受けてゐたが、いよいよその切なるに動かされ、かつは万葉伊勢源氏源平の歌枕や遺跡の見物かたがた下向することになった。その時の旅日記である。

出立にあつて贈られた田代春雄、山脇菅正、飯田秉悦、佐々木高陽、娘幾子らの餞別和歌が記されてゐる。七月十八日京をたち大阪の堀木町に宿る。十九日倉敷よりの差配で迎へに上つてきたりといふ舟が用意された。舟では「名所たづねんには心にまかする事もかなひかたく侍るべし。から路をゆかん」といひながらも舟で西行していくが、大物の浦より紀路がはるかに見えて、京にゐては到底見られぬ景色だと感動したなどとある。海路を主に。適宜陸行してたやすく、途中、楠氏之墓、人麿祠堂などの碑銘を書きうつしたりしてゐる。廿二日片上まで来る「所の振とて舟にのりたる人をかたはしづつあらため」とある。そこには倉敷よりの迎への人も来て待つてゐた。廿三日倉敷につき、漸く藤井氏にあひ、その後一ヶ月余りこの地に滞留したのであるが、その間川に出て魚をとりなどしてゐる中に口について出るのは百人一首の歌であつたなどと記してゐる。この年七月は小で、廿九日は晦日、酒津川が増水し、倉敷の町まで水が来るといふので騒いだとある。八月二日都より便りがあつて娘幾子の和歌などが書き記されてゐる。九日吉備津神社へ北東三里許りの道をゆく。滞留中、岡直敵といふ人の案内で倉敷近傍

を歩いたり、その家に招かれたりしてゐる。また、古今集序や源氏物語、論語などを講じたり、和歌を詠んだりもしてゐる。閏八月六日（七月が小で、閏八月があるので、この紀行の書かれた年を元禄十五年と推定したのであるが、文中には老境にはひつたことをのべてゐる）にやうやく倉敷を立ち帰路についた。九日大阪について、十日「三条二条のわたりをもすぎて家やどさへちかくなれば、待らん事など思ひつついそぐを、ほどなく万年橋のほとりかた折戸したる草庵にはひ入侍るも年ぶりぬる住家なれば、また心やすし」とこの旅日記を結んでゐる。

3 試筆和歌

縦二十五纏、横十七纏。仮綴表紙共十三枚。初めに「試筆中院大納言通茂卿」とある和歌はじめまり、菅雄及びその妻子らのも含めて八十五首を收む。菅雄を中心とした在京歌人の試筆和歌集。二葉自おもてに「元禄十七甲申曆」とある。

4 酔露翁加点草（仮題）

一 冊

縦二十九纏、横二十一纏。藍色表紙の装幀。題簽はない。本文三十三枚。

宝永三年菅雄五十才の時の題詠和歌を四季・恋・雜に部立し、加点したもの。巻頭は

春 元日

古としにまつ立初し春かすみ霞で今朝は空ぞ長閑き

5 手丹裏波口伝

写本 一 冊

縦十八纏、横十五纏の胡蝶表紙の枠形本。和歌連歌制作のために、主として助辞の用ひ方につき用例をあげて説明したもの。例へば

「にて」「る」の事

にてとるには上にを・は・も・からぬの文字なくてはかなひ
かたし

恋はたた身をつらかれのしはさにで
長からぬ世にこそおしき命にて

の如くである。跋があつて「夫和歌は我御門の御道なれば秋津嶋に
生れし身のゆるがせにすべき事かは、されど歌のおこりはぶりにし
文どもに多いへれば、今さらおろかなる筆にわづらはれむもおほけ
なし、ただてにをはのつづけがらこそ第一なるべけれ。てにはのこ
とやうなるはいひしらぬから 人の物語どもいたまし。その道のな
らひをもつたへきかで、をのが心のくま／＼にまかせたらんは誠に
おそろしけものの前後につまづきけるがごとくなるべきをや」と
あり、奥に

右之一巻者雖伝來之秘事以執心故授与之最不可許外見者也
享保六年五月 日

醉露堂

源 菅雄

花 押

手繭裏波切紙 ある。また本書には次の書を、つづけて写してゐる。

内容は、つつといふ事、物かはといふ事、かといふ事、そらんの事、何のあるといふ事など十一項目をあげ、右書と同方法をもつて略説用例をかかげてゐる。これにも跋があつて

右の詞いつれも一旦にては心得かたくなむ、和歌の意味をよくあちはひて工夫すべし、是等は常にあることなれど是非人のこころをつけぬ故に上下の首尾あひかたきなるべし

享保六年五月 日

醉露堂 菅 雄

土橋宗信丈

とある。土橋宗信は土橋友直の分家筋に当る。節斎良慶と号し、連歌を西山宗春の門に遊び、歌道を河瀬菅雄に学んだ。友直を助けて含翠堂を創設した人である。

また奥書には「右先師醉露翁河瀬氏の伝へられしところ也。保長らが志をつぎて学びんことをこよにより受けあたへ侍りぬ。よくよくみ、よく味ひて河瀬のながれたちやらず菅のねの末ながく此道にまとはづらむことをこひねがふことしかり。寛延元戊辰年閏十月日節斎良花押」とある。保長といふのは後出「古今見聞抄」を校合・書写した友直の養嗣子敬直のことで、包白と号した人である。

6 古今見聞抄 写本二十冊

縦十六・五厘、横二十二・五厘。薄茶色表紙の表帳で題簽がついてゐる。全五十巻、おほよそ二巻を以て一冊としてゐるので、なほ数冊が缺けてゐることになる。すなはち缺けてゐるのは、第五巻から第九巻までと、第十二、十三巻、第廿八、廿九巻、第四十巻から四十三巻の十三巻である。現存二十冊のうち、第四十八、四十九、五十の三巻だけは一巻を以て一冊としてゐる。

各巻には包白の奥書があり、書写・校合をした人をその手跡によつて推断し、かつ書写本の校合に菅雄の稿本を用いた巻々と、書写本が缺けてゐた為に稿本から包白が書写して補つた巻々とのあることを夫々の奥書に示してゐる。それを表示すれば次の如くである。

番号	卷数	書写した人	校合者	備考
一	一	如幽		
二	二	貞順		
三	三	誠齋		
四	四	貞順	同右	
五	十六	誠齋	同右	
六	十八	貞順	同右	
七	十九	不知何人手跡	同右	
八	廿一	貞順	同右	
九	廿三	伴一 誠齋と貞順 と木吉宗	包白	伯父誠齋以本書再校合包白
廿四	貞順			
誠齋	同右	同右	同右	
		同右	同右	以本書加校合包白
		同右	同右	

廿五無書写本以白

第廿五巻以後における書写本の有無をここに記す。

十廿七廿六同右

「九」の奥書によれば「有書写本」とあるが現存しない。

十一卅甘九廿八包白

本巻から第四十三巻まで缺

十九廿九廿四四十包白

「十」からこの「十九」まで、奥に書くものである。二日校合の如く書写校合の月日を記す。

二十廿五廿同右

州貝塚翁并賀野人自筆之本於泉元文已未八月廿二日包白(朱)同九月十二日一部校合判

右表中、如幽とあるのは三上令直の号で、貞順はその娘、名を豊と言つた。誠斎とあるのは土橋友直の号で、貞順はその妻である。この書を現存の姿で残した包白が、「伯父誠斎」と書いてゐるのは、彼が誠斎の甥にあたるからである。

「土橋氏三上氏三宅氏過去帳」及び「土橋家系図」によれば、包白は前項にも述べた通り、友直の養嗣子であつたが、元文四年(二十二才)土橋家を出て、しばらく泉州貝塚の実家にとどまつてゐたやうである。奥書によれば、包白が、友直や、その妻や義父の手跡になる本書を校合したり、その缺けた巻を菅雄の稿本から書写して

補つたりした元文四年七月から九月といふのは、右の実家にとどまつてゐた間のことであつたことがうかがはれるのである。

本書の大尾には「洛之西衣笠岡籠吟阿堂專雄」なる自署のある跋文がある。それによると、本書は、菅雄が洛西太秦の惣持院といふ僧坊の住持と親交があつて、そこに三年許り住まつてゐたが、集る人々に和漢の書を講じた。その中に、古今和歌集に興味をもつものあつて、彼らのために諸抄に略してゐるところ、誤つてゐると思はれる点などを説きあかしたが、やがてそれらに、自説を加へて一部となし、名付けて古今見聞抄したものが本書であるといふ。

7百人一首さねかづら

八冊

縦二十三幅、横十七幅。砥粉色木目模様の表紙を装した写本。題簽には「さねかづら」とあり、本文一葉おもてに「百人一首左禪萬巻一河瀬菅雄撰」とある。

総論は「和歌溢觴」「題号詠曲」「百人一首編撰」「定家卿系図」「當書編撰意趣」「於新今古不審」「百人一首花実」「百人一首作者」「百人一首相伝」といふ項目を立ててある。

宗祇、幽斎以来の百人一首の旧注に従ひつつ私見を加へたもの。本書は近代名家著述目録をはじめ国学者伝記集成その他に「百人一首玉萬」とあるものと同一であると考へられる。それらには冊数も記してゐないところからあるひは本書の書名を誤り伝へたものであるかと疑はれる節もあるが、さうした別称で呼ばれたことがあつたのかも知れない。

附記 河瀬菅雄のことについては本誌第十三輯、「伊勢物語辭露について」を御参照願ひたい。

(八木 翁)